

# さんしゃ Zapping

Vol. 32 No. 2 (通巻 186 号)

2017 年 9 月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsumeikan.ac.jp

<http://www.ritsumeikan.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

## 〔目 次〕

### <自著紹介>

『旅行のモダニズム』以後 赤井 正二 p. 2

「若者」と過ごす日常の中で書いた本  
『社会運動と若者—日常と出来事を往還する政治』 富永 京子 p. 5

### <院生自己紹介>

社会人が大学院で学ぶ意義 小嶋 理恵子 p. 8

### <エッセイ>

討論者が口火を切る研究会  
—ヨーロッパ医療政策研究会 (EHPG) の進め方に思う 松田 亮三 p. 11

## < 自著紹介 >

# 『旅行のモダニズム』以後

立命館大学名誉教授

赤井 正二



昨年10月末、産業社会学会の出版助成を受けて、『旅行のモダニズム』を出版した。有り難いことに複数の方が書評の労をとられ新聞に掲載していただいた。おかげさまで本書のタイトルや内容が多くの人々の目に触れる機会に恵まれた。本学会の皆さんをはじめ多くの方々に感謝している。

本書は、1) 「モダニズム」

に関する思想史的な研究と、2) 文化変動の社会的条件にかかわる社会学的な研究という二つの問題関心に基いて、主に大正昭和前期の旅行文化に関する事象を分析したもの、と自分では考えている。本書成立の経過や背景の動機などは「あとがき」で触れたので、ここでは今後の研究の内容と課題について考えていることを少し述べることにしたい。

『旅行のモダニズム』の補完と戦後日本の旅行文化研究が次の課題の一つと考えている。

本書では主に、鉄道省の動向と民間の旅行団体・知識人・一般旅行者の動向との絡み合いに注目したが、関西では私鉄各社も旅行文化の展開に深く関与してきた。阪急

の事例研究は多いが、南海電鉄を事例として、創立期から戦後高度成長期までの経過を研究している。関西の私鉄については資料もよく整理されており先行研究も多いが、重複をいとわず、南海鉄道の事業者が観光開発や関連分野の展開についてどのような取組を行ってきたのかを整理している。

この研究が『旅行のモダニズム』で行った大正昭和前期の旅行文化研究の補完となり、また戦後を対象とした研究の一つの端緒となることを期待している。

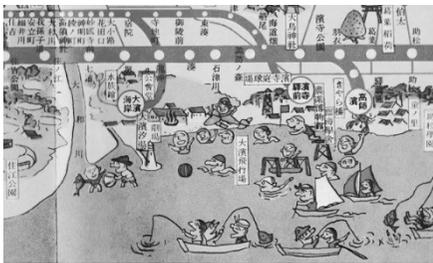
阪堺鉄道（1885-）に始まる南海鉄道（1895-）は実質的に現存するわが国最古の私鉄であり、その歴史は近代日本における旅行文化の歴史でもある。このことはこの鉄道が大阪一堺一和歌山という都市を結ぶ鉄道であるとともに、沿線に多くの名所や旧跡が高密度に点在する臨海地帯や郊外丘陵地帯を含むという特質によるところが大きい。沿線にある難波・住吉・浜寺・大浜・淡輪・

新和歌浦・白浜・熊野といった場所は、賑わう都市文化・神社参り・避暑・海水浴・釣り・ハイキング・季節の行楽、学びやエンタテインメントの享受といったの旅行文化の受け皿となった。ただ、それぞれが開発されてきた経過の中には、他の鉄道事業者との競争や住民との軋轢もあり、さまざまな選択の結果でもあったように思われる。道者・巡礼者の伝統的な神社めぐりや富裕層の別荘需要から新中間層の日帰り行楽への重点の移動、水族館や公民館といった近代的施設の建設と講演会などのイベント、遊園地遊具の充実、海水浴・テニス・相撲などのスポーツ重視と歓楽地との差別化など、阪堺電気軌道

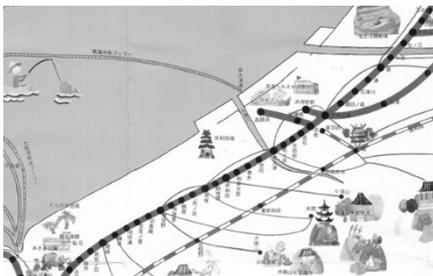
（1910-1915）・阪和電気鉄道（1926-1940）などとの激しい競争の下でこうした変化が進んだ。

またその中には、戦後の旅行や観光で大きな問題となっていく海浜の環境破壊や「低俗化」という論点も生じている。この点で戦後高度成

長期までの南海電鉄の研究は、戦後日本の旅行文化研究の一つの端緒となりうるだろう。各時代の「沿線案内図」はこうした変化をよく表現している。



「南海沿線名所案内図」1936年  
(昭和11年)部分



「南海沿線観光案内図」1961年  
(昭和36年)部分

ただ戦後の社会文化の場合には、別途検討が必要な方法的課題が幾つかあるように思われる。

まず戦後の社会文化をとる際には、「市民社会

から大衆社会へ」といったC.W.ミルズ的な構図と結びついた「モダニズム」という問題構制では十分でないだろう。「マス～」という量の急激な変動が様々な変化をもたらしていったことをどのような枠組みで捉えたらよいのだろうか。

また、鉄道事業を事例とする場合は、社会文化運動の場合とは別の意味で個人が重要になる。阪急の小林一三(1873～1957)は一般にも有名だが、阪急の前身・箕面有馬前電気軌道の初代社長岩下清周(1857～1928)、鉄道省から大阪電気軌道に移り近畿日本鉄道の初代社長となった種田虎雄(1883～1948)、山陽鉄道、南海鉄道の創始者の松本重太郎(1844～1913)などなど、この人物抜きには語れないといった興味尽きない人物が多数いる。とくに山陽鉄道から南海鉄道に移り、阪堺電気軌道との競争・合併を主導した大塚惟明(1864～1928)はサービス・文化事業の推進役でもあった。このような経営者個人

の役割をどのように考えた  
らよいのだろうか。

最後に、本書につながる研  
究は私が講義「現代文化論」  
「メディア理論」「観光文化  
論」で採り上げてきた内容だ  
が、「コミュニケーション論」

「現代人間論（総合心理学  
部）」で採り上げてきた方法  
論的な内容をまとめるのが  
第二の課題と考えている。い  
ずれも時間との競争という  
感じがしている。

## 「若者」と過ごす日常の中で書いた本 『社会運動と若者—日常と出来事を往還する政治』

富永 京子



—一緒にテレビを見ていると、お父さんが言うんです。中国人がどうか韓国人がどうか。やめてほしいけど、強く言えない。お世話になってるし、尊敬しているから…。

本書は、2011年以降に日本で話題となった脱原発運動、特定秘密保護法反対運動、安保法制に対する抗議行動に参加した「若者」たちが、どのような動機から社会運動に従事したのかを問うものです。社会運動論の多くは、デモやシンポジウムといった「出来事」に主に注目してきましたが、学校や家庭で過ごす「日常」もまた若者たちの政治を形作っているという前提のもと、「日常と出来事の往還」として社会運動を捉え、分析しました。そこか

ら見えてきたものは、華やかで劇的に見える運動の表舞台とは裏腹に、彼らが可能な限り「意識高く」「政治的に」見えないように、「浮かない」ように「普通」を志して生活している点、そういった日常の中でも、熱心に社会問題に関する勉強をしたり、シェアハウスや寮での振る舞いに自由や平等といった価値観を反映している点でした。その上で、若者たちの運動は、普段から消費している音楽や学んだ学問の理念に基づき、あくまで日常の延長として行われていることを明らかにします。

この本は、前著『社会運動のサブカルチャー化』（せりか書房）から半年足らずで刊行しました。短い期間で出版した理由は、大学に就職して、年長者として「若者」と出会い、出会った衝撃を忘れないように書いてみたかったためです。その「若者」との出会いの場として、他ならぬ立命館大学産業社会学部がありました。筆者は前著を通じ、社会運動に携わる人々が

日常と出来事を行き来しながら、自らの政治的理念や理想を形成するさまを「社会運動サブカルチャー」という概念から説明しました。それは例えば、二種類だけではない多様な性のありかたに沿った振る舞いをしたり、民族的なマイノリティの人々に対する配慮をしたり、というもので、こうした振る舞いは、社会運動に携わる人々の日常と出来事に同様に反映されます。

しかし、かりに政治的に強い問題意識を抱いていたとしても、家庭や職場で過ごす「日常」とデモや学習会の場である「出来事」に、政治的理念を終始一貫して反映できる人の存在自体が非常に稀であることもまた認識しておかねばならないでしょう。いくら反権威を主張していたとしても、職業や家庭生活の都合上権威的に振る舞わねばならない側面もあるかもしれません。グローバル化から距離を取りたい気持ちもありますが、スターバックスやマクドナルドを使わ

なくてはならないこともあるでしょう。こうした「出来事」と「日常」の間にある葛藤を強く認識したきっかけは、ある講義の終わりに受講生の方からかけられた、本稿の冒頭で紹介した言葉でした。この言葉を聞いた時、「若者」に注目する学術的な意義が明確になったように感じました。社会に対する諸義務を免除され、労働よりは消費の担い手として見なされる一方、多くの場合親の扶養下にいなければならない、学校という場で年齢・属性的な均質性の高い人々との関係構築を迫られる。それゆえに政治との関わり方を制限される「若者」という担い手は、「社会運動サブカルチャー」の概念を拡張する上でも、政治について関心を抱くことと語ること／実践することの断絶を論じる上でも、非常に重要だと感じたのです。

本書は、立命館大学に赴任した2015年の夏から、二年目の締めくくりである2017年の2月まで書き続けた結果出来上がったものです。大

阪、東京、札幌、福岡……といった都市をめぐり、社会運動に参加した若者を追いかける「出来事」と並行して、京都で過ごす「日常」の中で産業社会学部の学生たちと話し続けてきました。当初、筆者自身の日常と出来事を通じて出会った若者たちは、それぞれ全く違う世界を生きているように感じられました。しかし、社会運動に参加する学生も、一見して政治に関心を持たないように見える人が少なくない「産社生」も、同じように2010年代の後半を「若者」として過ごしており、ある種似たような形で自らの政治と生活を捉えていることが、段々と明らかになってきたのです。

本書の中で、社会運動に参加する若者たちは「意識高く」なく、過度に政治的に見えず、ごく「普通」に見えるよう、工夫しながら自らの政治関心を友人や家族に伝えようとしています。私はその姿勢に、基礎演習や専門演習でうまく他人と調和しつつも、個人的な引っかかりや問題意

識を潜めようとする学生の態度にどこか近いものを感じてなりません。このような若者たちの行動様式は「同調志向」とか「空気を読む」といった形で簡単に括っていいものではなく、教室で、バイト先で、リビングですぐ隣りにいる、自分と違う経験をし、自分と違うように社会を生活している友人や家族への慎重な配慮の結果でしょう。それは彼らに主体性や自発性がないのではなく、他者と経験や生活している背景が異なり、同じであることが自明ではない「個人化」「多様化」の時代に他者と関係を築こうとする限り避けられ

ない態度なのではないでしょうか。

出版にあたって、産業社会学会出版助成金（2016年度）をいただきましたが、それにとどまらず、本書は上述した点でも、産業社会学部に在籍しなければ完成しなかった研究成果でもあります。教育者としても研究者としても未熟であるにもかかわらず、日頃より研究・教育の機会を下さり、心より御礼申し上げます。この本が、産業社会学部に所属される先生方、職員さん、何より院生・学生の皆さんにとって何らかの役に立てば、誠に幸いです。

## < 院生自己紹介 >

# 社会人が大学院で学ぶ意義

社会学研究科博士課程後期課程 4 年

小嶋 理恵子

私は、助産師免許を取得した後、もう一度勉強したいと思い、立命館大学法学部二部に入学しました。そのまま立命館大学社会学研究科博士

課程前期課程に進学し、現在、博士課程後期課程に在籍しています（休学中）。法学部二部の時には、吉田美喜夫先生が、クラス顧問のような立

場にいらっしやっただけだと思います。

先生に相談したり、年齢の離れた学生と、意見交換をしながら発表原稿を作成する等、大いに刺激をもらいました。また、臨床の忙しさと離れて、自分が援助した患者さんや赤ちゃんのことを客観的に考えられるようになった時、助産師の役割を明らかにしたいと思い始めました。思い切って、修士課程に進学し、桜谷先生、中川順子先生や、中村正先生のゼミにも入らせていただき、社会学を専門にされていた方たちとの意見交換ができたことが、自分の博士課程での研究テーマの明確化につながったと思います。また、修士、研修生の時代に、医療生協プロジェクトに所属する機会が持てたことで、篠崎次男先生からは、「助産師は何をすればよいのか」という問いを頂き、医療生協病院の子育て班への調査を行うことができました。その中で、子育て支援の医療職と当事者との間にあるギャップも見えてきま

した。その後、中川順子先生、齋藤真緒先生たちと、旧上中町でのプロジェクトにも参加する機会を得て、妊娠期から子育て期の支援の在り方について、助産師として自分の援助を振り返る機会にもなりました。また、医療生協プロジェクトの一員として、イギリス、スウェーデンの助産師活動の実際を視察することができました。特に、スウェーデンでは思春期センターの訪問を通して、女性の一生に寄り添う助産師の役割を改めて考えるきっかけになりました。また、スウェーデンでは、臨床で働く男性助産師と出会いました。その当時日本でも男性助産師の是非に関することが言われた時期でした。彼はインタビューに対して、「自分が「男性」だからといって産婦さんたちに拒否をされたことはない。」と返答しました。逆に何をこだわっているのかというような雰囲気でした。また、その援助を受けた女性も満足しているとのことだったので、日本での反応との差

に驚いたことを覚えています。立命館での経験が無ければ、社会が人に与える影響、人が社会に与える影響について深く考えることは無かったと思います。これらの経験があったから、博士課程後期も立命館で学びたいと思います、進学を決心しました。主査は松田亮三先生で、英語だけでなく、いつの間にかフランス語も習得されて、びっくりすることばかりです。私は猪突猛進なところがあるのですが、松田先生に論文指導を受けると、自分が臨床感覚で動いており、そこに理論が無いことも気づきました。立命館で修士論文を書く時にも、こんなに大変なのかという思いを持ちながら書いていましたが、博士論文をまとめるということと比べると比較にならないように思います。仕事と院生の両立は、難しいと思う反面、院生で得た学びを自分が教えている看護・助産の学生に還元できることもあります。松田先生のゼミでは、様々な分野の方と意見交換が出来るので、視

野が広がります。そこから自分に見えていなかった援助について気づくこともできます。本当に貴重な時間が持てたと思います。松田ゼミには医療職が多く、修士の時代には知り合った方もいて、同じく看護・助産師教育をされています。私は、仕事に追われてしまうこともあります。2009年に科研費が認められたことで、自分が研究者として第一歩を出せた思いがしました。海外での発表も経験し、どう伝えたらよいのか、聞いたことが何となくわかっていても、意見を伝えるための語学力も必要だと思いました。今でも十分な能力があるとは思わないので、これからも努力していきたいと思います。こうやって改めて振り返ってみると、立命館に来なければ、数回の海外発表なんて考えなかったと思います。

いま、博士論文の準備をしています。現象をどうアセスメントしたらよいか、どの様に論文にまとめたらよいか試行錯誤の毎日です。ここまでの道のりは、回り道のよ

うな、それでいて、その回り道がよかったのかなと思えるような感じもします。研究者としては、博士論文を提出してようやくスタートに立ったということなのでしょうが、まだまだ自分の研究時間をどう捻出するのか、段々、体力も落ちてきている中、仕事と院生という立場をどう調整していったらよいか悩むことも多いです。でも、逆に学生という立場があることで、肩の力を抜ける時があるのかもしれないなあと思ったりもします。もう一度勉強したい、臨床の「もやもや」

を明らかにしたいと思って入学した立命館大学ですが、いま、この大学を選んで良かったなと心から思います。ここでは、違う職種の人や先生方の視点が、自分の問いを刺激してくれるからです。この大学に来たことで、研究とはこんなにも難しく、でも楽しいことだということがわかっただけでも、良かったです。私が立命館で出会ったすべての先生方、ゼミ生だった方、現在同じゼミ生の方に深く感謝いたします。これからもよろしく願いいたします。

## <エッセイ>

### 討論者が口火を切る研究会

—ヨーロッパ医療政策研究会 (EHPG) の進め方に思う

松田 亮三

しばらく参加できていないが、筆者はヨーロッパ医療政策研究会 (European Health Policy Group) という LSE の Adam Oliver さんが中心になって組織して

いた研究会に何度か参加していたことがある。この研究会は 2 日の日程で半年に一度開催されており、おおむね 1 演題 1 時間が割り当てられ濃密な議論がされる。この議

論の仕方というのが独特なのである。

というのは司会者の導入の後、最初に話すのは報告者ではなく討論者なのである。討論者はフルペーパーを読んで、20分程度でその内容を紹介し批判的なコメントをする。このため、報告者は研究会開催4週間前にフルペーパーを提出することになっている。討論者の議論の後、報告者は手短かに応答をする機会を与えられるが、その後はフロアを交えた討論となる。

この方式はフルペーパーの提出が適切になされない限り成立しない、というところが特徴である。また、話したことではなく書いたことに基づいて議論が始まり—もちろん議論は口頭で行われるのであるが一議論をふまえて論文を改訂する、という流れが見通しやすいのも特徴だろう。論文の質をあげていく、そして時間を有効に使うという点では、大変よい方式であり、ここで話された演題のかなりはその後各分野の一—というのは、経済学、政治学、社会学などかなり背景が違う研究者が参加して

いるので—国際ジャーナルに掲載されている。ただ、討論者にはかなりの負荷がかかるので、それをあえて行おうという同僚—特に経験のある研究者—の協力が不可欠である。EHPGではこのやり方を10年以上継続している。

社会政策学会などフルペーパーの事前提出を義務付けている学会は多いと思うが、討論者が口火を切るといふこの研究会運営のスタイルはまだ国内の研究会では経験したことがない。いつか機会があれば、試みてみたい。

## Zapping 原稿募集

研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめたのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

返信は [s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp](mailto:s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp) に送付していただきますようよろしくお願いいたします。